

鶏卵



◆飼養動向

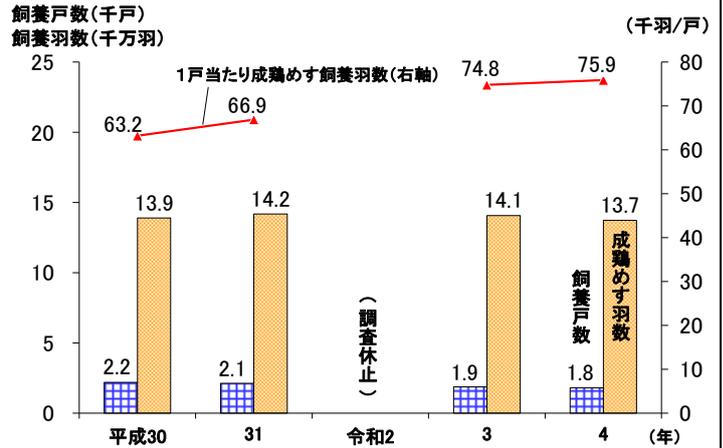
4年2月現在の採卵鶏飼養羽数、前年0.5%減

採卵鶏の飼養戸数は、小規模飼養者層を中心に減少傾向で推移しており、令和4年は1810戸（前年比3.7%減）と前年をやや下回った（図1）。

飼養羽数は、近年増加傾向で推移していたものの、3年は高病原性鳥インフルエンザ（HPAI）が発生した影響により減少し、4年も同様に1億8010万羽（同0.5%減）と前年を下回った。このうち実際に産卵を行う成鶏めすの飼養羽数は1億3729万羽（同2.4%減）と前年をわずかに下回った。この結果、1戸当たりの平均成鶏めす飼養羽数は、7万5900羽（同1.5%増）と前年をわずかに上回った。

なお、成鶏めすの飼養戸数および飼養羽数を規模別に見ると、成鶏めすを10万羽以上を飼養する層は、飼養戸数全体の20%を、飼養羽数全体の79%をそれぞれ占めた。

図1 採卵鶏の飼養戸数および成鶏めす羽数の推移



資料：農林水産省「畜産統計」

注1：各年2月1日現在。

注2：成鶏めすとは、種鶏を除く6カ月齢以上のめすをいう。

注3：飼養戸数は、種鶏のみの飼養者を除く。

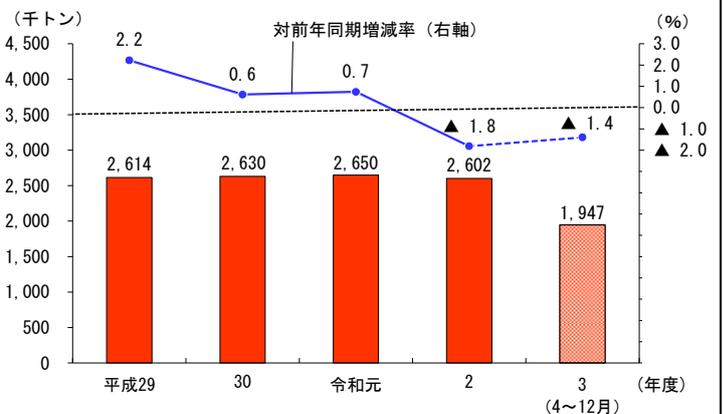
注4：令和2年は農林業センサス実施年のため、調査休止。

◆生産

3年度4～12月の生産量、前年同期比1.4%減

鶏卵生産量は、これまで260万トン前後でおおむね安定して推移してきたが、平成25年度後半から27年にかけて鶏卵相場が好調に推移したことから生産者の増産意欲が高まり、生産拡大が進み、生産量は増加傾向となっている（図2）。令和元年度は264万9875トン（前年度比0.7%増）と過去最高となったものの、2年度は、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の影響により価格が低水準で推移したことやHPAI発生により採卵鶏の殺処分羽数が多かったことから減少した。3年度（4～12月）もHPAI発生の影響などにより、194万7154トン（前年同期比1.4%減）と前年同期をわずかに下回った。

図2 鶏卵生産量の推移



資料：農林水産省「鶏卵流通統計」

注：令和4年1月以降のデータは未公表。

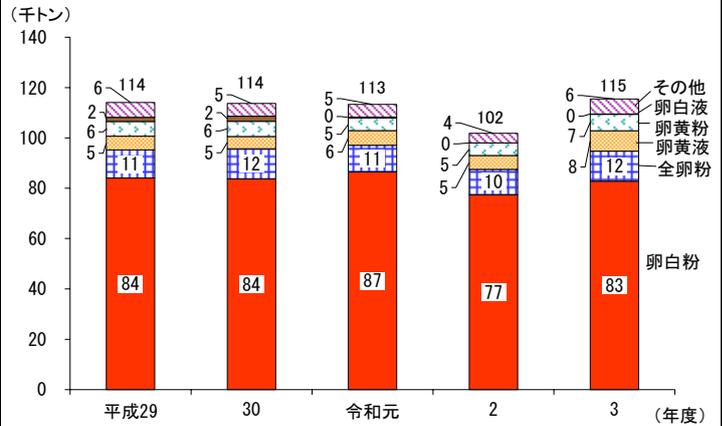
◆ 輸 入

3年度の輸入量、前年度比13.4%増

鶏卵（ふ化用除く）の輸入量（殻付き換算）は、国内消費量の4%程度で推移している。輸入量の約9割が保存性に優れ、輸送コストの安い加工原料用の粉卵であり、主にオランダ、イタリアおよび米国から輸入している。なお、粉卵の輸入量のうち8割は卵白粉であり、ハム・ソーセージのつなぎの原料などに使用されている（図3）。

令和2年度は、COVID-19の影響により業務用需要が大幅に減少した影響などにより、4年ぶりに11万トンを割り込んだ。一方、3年度は、需要が回復したことや前年度に減少した反動などから11万5475トン（前年度比13.4%増）と前年度をかなり大きく上回った。

図3 鶏卵輸入量の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：殻付き換算ベース。

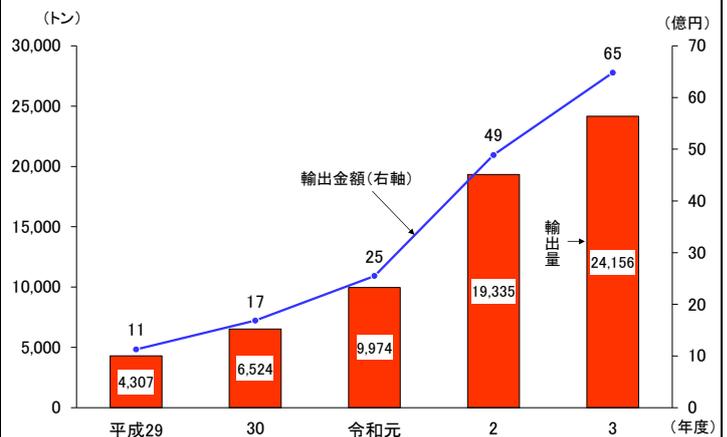
◆ 輸 出

3年度の輸出量、前年度比24.9%増

近年、鶏卵の輸出量は、生食可能な品質が評価され、増加傾向で推移している。令和2年度に、最大の輸出先である香港において、COVID-19の影響により内食化が進んだことなどを背景に、現地の日本産鶏卵の需要が増加し、3年度も好調に推移したことから鶏卵（殻付き卵）の輸出量は2万4156トン（前年度比24.9%増）、輸出額は64億8108万円（同32.5%増）といずれも前年度を大幅に上回り、過去最高を更新した（図4）。

輸出先を見ると、香港（2万3416トン、62億6408万円）、シンガポール（344トン、1億4198万円）のほか、台湾、マカオに輸出されており、輸出量の約97%が香港向けとなっている。

図4 鶏卵の輸出量および輸出金額の推移



資料：財務省「貿易統計」
注：殻付き卵（食用）。

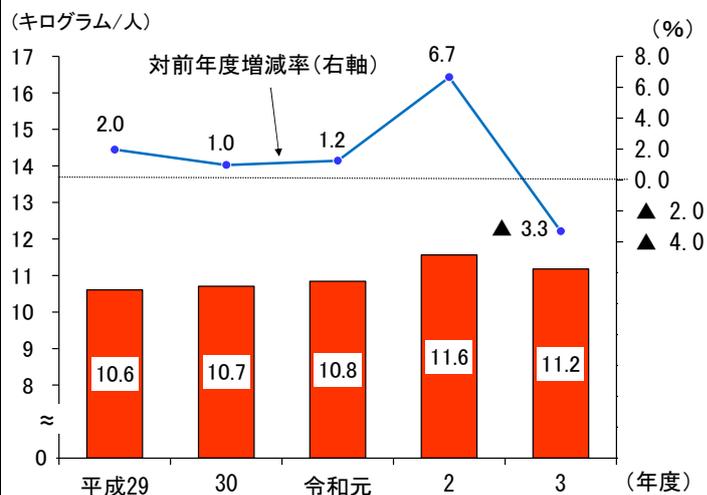
◆消費

3年度の1人当たり家計消費量、前年度比3.3%減

鶏卵の家計消費量は、量販店などで販売されるテーブルエッグに加え、近年、食の簡便化に対応してコンビニエンスストアなどで販売されている卵加工品の需要の高まりを受けて増加傾向にある。

令和2年度は、COVID-19の影響による巣ごもり需要を受けて大幅に増加したものの、3年度は巣ごもり需要に落ち着きがみられたため、年間1人当たりの消費量は11.2キログラム（前年度比3.3%減）と前年度をやや下回り、8年ぶりの減少となった（図5）。ただし、3年度もCOVID-19の影響を受ける元年度以前の消費量を上回る水準となっている。

図5 鶏卵の家計消費量（年間1人当たり）



資料：総務省「家計調査報告」

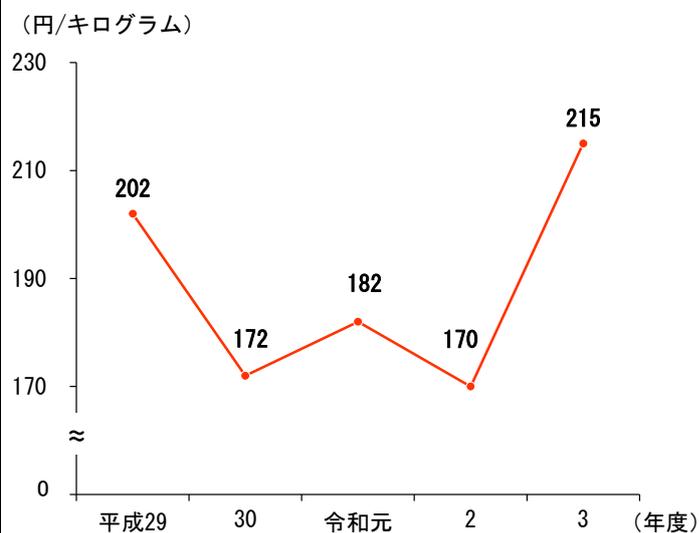
◆卸売価格

3年度の卸売価格、前年度比26.5%高

鶏卵卸売価格（東京全農系M玉）は、夏場の不需要期に向けて低下し、年末の需要期に向けて上昇する傾向がある。

鶏卵を使用したデザートやマヨネーズなどの加工向けを含めた旺盛な需要などを背景に生産拡大が進み、需要を上回る供給が続いたことから、平成28年度以降、低下傾向で推移していた。令和元年度に、成鶏更新・空舎延長事業の発動や台風被害に伴う供給量の減少などを受けて卸売価格は上昇したものの、2年度は、COVID-19の影響により業務用需要が大幅に減少したことから、再び低下した。3年度は、HPA I発生に伴う大幅な供給の減少により、1キログラム当たり215円（前年度比26.5%高）と前年度を大幅に上回り、4年度ぶりに200円台まで上昇した（図6）。

図6 鶏卵の卸売価格（東京全農系M玉）



資料：JA全農たまご株式会社「相場情報」
注：消費税を含まない。

◆小売価格

3年度の小売価格、前年度比4.0%高

国内の鶏卵消費量のほとんどが国内生産で賄われていることから、鶏卵小売価格は卸売価格の変動に影響を受ける傾向がある。

令和3年度の鶏卵の卸売価格（東京全農系M玉）は、は、HPA I 発生の影響を受けて大幅に上昇したことなどから、鶏卵小売価格（東京都区部）は1パック当たり232円（前年度4.0%高）と前年度をやや上回った（図7）。

図7 鶏卵の小売価格（東京都区部）

